

文房具資料館  
文具資料館  
紙の博物館

佐々木 享

## 文房具資料館

文房具とは、「筆記具や紙、ナイフ、はさみなど、書くことに関連する道具の総称」とされる（平凡社『百科事典』）。この文房具の博物館である文房具資料館は、東京都台東区柳橋1丁目、JR浅草橋駅を下車し、線路（のガード）にそって両国方向に徒歩15分の小さな博物館である。隅田川岸がもう間近かな、4階建てビルの1階が「文房具資料館」となっている。私の手元にある博物館案内書類には記載されていなかったの、ここを探しあてるまでには少しばかり苦心した。

行ってみて、文房具の博物館を創りにくい理由が少しわかった。教師をふくむ一般の人にとって文房具とは、街の文房具屋さんで売っているものだ。文房具屋さんの多数派は、小規模な小売店である。これが、文房具の博物館が創られにくい第1の理由らしい。

他方、私たちが文房具とおもひ込んでいるものを製造する側からみれば、それは大抵は事務用の器材・器具であり、販路としては（多分）その方が多いのだ。事務用機器のメーカーには中企業もあり、多分その連合組織もある筈だけれども、そこからは、文房具の博物館を創ろうという発想は生まれにくいらしい。（実際、わが国には事務用機器の博物館は、この「文房具資料館」を別とすれば、私の知る限り、まだないらしい。）

文房具には欠かせない紙については、後述のように別に博物館ができています。このことも、文房具の博物館が創られにくい理由になっているらしい。

というわけで、目下のところ、この文房具資料館は珍しい貴重な存在である。中国では

古来、文房四宝と称して筆、墨、硯、紙を尊重してきたとされ、この館では、このうち紙をのぞいた古くからの品々を収集、展示している。昭和の初期まで子どもたちが手習いに使っていた石板も、僅かだが集められていた。各種のそろばん、スケール（ものさし）、計算尺、私の学生時代の頃までよく使われていた計算機（タイガー等）。印字機は、和文、英文、カナのタイプライターは集められていたが、ワープロ等のパソコン（とその応用機）類はまだ全く入っていない。まだ新しいし、集め始めたら収集しきれないということか。子ども用のいわゆる筆箱、下敷のような学用品もよく集められている。竹製の物指が集めにくいという話は意外だった。

念のために尋ねた謄写版やそのための鉄筆等はなかった。総じて学校用品は手薄であった。この種のもは、古い校舎保存を兼ねて各地に誕生している教育博物館（？）には集蔵されているのかも知れない。あれ程あったものが今やどこにもないということにならなければいいが、と想いながら退出した。

## 文具資料館

京都市の街中の、小売店としては大きめの文適堂という文房具屋さんが、自宅兼用ビルの4階のフロアに所蔵する古い文房具を展示している。私が文房具の博物館を探していた際に、博物館問題を研究している齊藤啓修氏がさるリストからひろいあげてくれたのがこの文具資料館である。店の人に声をかけると開いてくれる方式である。上記の文房具資料館より規模は小さい。個人商店の事業（？）としては意のあるところを汲むべきなのかも

知らない。

文通堂から徒歩10分の所(〒604京都市中  
区木屋町二条下ル Tel. 075-255-0980)に、  
島津製作所が創設した島津創業記念資料館が  
ある。ここは水曜が休館日なので要注意。

### 紙の博物館

「紙の博物館」は、東京都北区掘船、JR  
王子駅下車、飛鳥山公園の反対側、徒歩2分  
のところにある。王子製紙等が出資した財団  
法人が経営しており、いまのところ製紙に関  
する最も充実した専門博物館の1つである。

紙=製紙には、エジプトのパピルスに始ま  
る長い歴史がある。わが国には、中国から伝  
わった製紙法を軸に、今日では和紙とよばれ  
るものながく用いられた。明治期になると  
西欧の製紙法が伝わり、洋式製紙工業が発達  
し、近年では紙の生産、消費では世界第2位  
となっている。紙の消費量は1国の文化水準  
のバロメータといわれる。この博物館では文  
明の発達過程が地味な技術に支えられてきた  
さまを見ることが出来る。

展示は7つの部屋に分かれている。

第1室では、洋紙の原料や生産機械に関す  
る事項が展示されている。紙が作られる過程  
のおよその概念が得られる。技術の発達史を  
画したいくつかの歴史的遺産たる機械もここ  
に展示されている。一本の樹木から作られる  
新聞紙の量を展示しているのは、よい工夫だ  
とおもわれた。

第2室には、種々な洋紙の見本や加工製品  
が展示されている。電気絶縁材としての用途  
など、日常生活からは見えにくい用途もてい  
ねいに展示されている。

他方、石油化学製品など紙に代わり得る材  
料の開発研究は少なくないのに、公職選挙の  
投票用紙などごく一部の特殊な領域に用いら  
れるもの以外には、いまだに開発は成功して  
いないことが知られる。紙の発明の偉大さを  
教えられるわけで、このことはもっと強調し  
てもよいように感じた。

第3室は、書画の作品展示。第4、5室  
は、日本の文化を支えてきた和紙の歴史、現  
代の各地の和紙などが展示されている。

第6室は王子製糸K. K. の歴史がパネル展  
示されている。たんなる1会社の歴史という  
ことはできない。それは、事実上の近代日本  
の製紙工業の歴史なのだから。その意味でい  
えば、社史を製紙工業史に位置づける工夫が  
あってもよかった。

第7室は、和紙がつくられる工程、種々な  
原料、道具等を展示している。ここに力を注  
いでいる感があった。つい最近までは、紙の  
博物館への期待はここに集中していたのかも  
しれない、とふとおもう。

別棟の2階が製紙関係の書物を集めた図書  
室になっている。前述の文房具資料館や文具  
資料室には観覧者に公開している図書はない  
ので、文房具の歴史を知りたい人にも参考に  
なる書物が多い。土曜日だったためか、大勢  
の人が利用していた。

せっかくの専門博物館という目でみると、  
若干のもの足りなさは否めない。現代の製紙  
工場は巨大な装置産業であり、わかりやすい  
筈の最終工程も大きな機械でかつ高速運転を  
している。その点で、後に紹介する名古屋の  
産業技術記念館のような大規模な館をつくっ  
たとしても、現代の製紙工場を再現すること  
は困難であるに違いない。工場見学をできな  
い人のために博物館があるのだから、パネル  
にしても現代の製紙工業をわかりやすく展示  
する工夫が欲しかった。

最近随分改善されたけれども、製紙工場  
は、その廃棄物に悪臭があり、ヘドロになる  
など環境上の問題も多かった。紙のリサイクル  
への関心だけでなく、この面での歴史への  
注目があってもよいようにも思った。

この紙の博物館見学には「おまけ」があ  
つて、JR王子駅と博物館との間に線路があ  
って、もう姿を消してしまったとおもわれて  
いる都電(旧市電)がいまなお営業運転されて  
いるのを見ることが出来るのだ。